

沖縄県本部町東のエイサー

小林 公 江

(教育学科教授)

小林 幸 男

(京都教育大学名誉教授)

はじめに

沖縄の芸能であるエイサーは、本来、村人が旧盆に家々を廻って踊るものである。エイサーには、大太鼓と締太鼓、あるいは半打鼓を打ちながら踊るエイサー（太鼓エイサー）や手踊りを中心とするエイサー（手踊りエイサー）など、多様な形態がみられる。太鼓エイサーが、戦後、急速に発展し広がっているのに対し、手踊りエイサーは、古い形を残しつつ、主に沖縄本島北部、中でも、本部半島地域（名護市西部・本部町・今帰仁村）に今も多数伝承されているが、過疎化や考え方の変化から、伝承曲の減少や伝承自体が危ぶまれる状況も生じている。

本稿ではこうした状況を踏まえつつ、太鼓エイサーを導入しながらも伝統的な手踊りエイサーの伝承を模索する本部町大東山の東区に注目し、1995年～2007年の調査に基づいてエイサーの状況を報告し、併せて手踊りエイサーの歌詞・楽譜資料を作成することを試みた¹。

1. 東エイサーの概観

東は本部町の西南部に位置し、西は渡久地、北は山里、南は辺名地、東は伊野波に接している。登録人口は2007年3月末で513世帯、1374人だが、実数は約930人。元は本部町の中心地である渡久地の小字であったが1946年に分区、独立した。その後、周辺からの流入と相俟って渡久地に並ぶ人口を抱えるようになり、更に2005年の大嘉陽、山里との合併で新字大東山の中核として再出発している。

東では、現在、手踊りエイサーと太鼓エイサーの両方が伝承されている。このうち、より

伝統的なものは、本部半島に典型的な男女による手踊りの円陣エイサーである。三線の調絃（本調子と一二揚）ごとに、各10曲前後をあたかも1曲のように連続して踊るもので、東は分区以前から渡久地とは別に行っていた。一方、太鼓エイサーは1970年頃に具志川市赤野（現、うるま市赤野）から導入した新しいものだが、それでも既に30年余の歴史を持っている。

手踊りエイサーはかつて青年層が担っていたが、太鼓エイサーの導入後、恒常的には行われなくなった。それに伴い担い手も消防（壮年男子）や婦人会・老人会へと移っている。

以下、両エイサーの状況を報告する。

(1) 手踊りエイサー

手踊りエイサーは、太鼓エイサー導入後も必要に応じて婦人会や老人会が門付けや集落の催し物などで行っている。

長らく地謡（歌・三線）を担ってきた宇根良和氏（1935生）によれば、かつては、旧暦6月25日の六月御祭に行われる隣集落、伊野波の綱引を見ての帰りから練習が始まった。当時、練習は大変に厳しく、先輩達から叩かれることもあったという²。初めの一週間から10日ほどは歌を中心に練習したが、これは、本部半島地域のエイサーでは踊り手も歌の多くの部分を担当し地謡と掛合いをしながら踊ることや、歌詞内容が動きの変化のきっかけになるということと深く関わっているからであろう。この頃はまだ電灯がなく、瓶に石油を入れて燃やしたので、鼻の中が真っ黒になったという。実際に門付けで踊るのは本調子の数曲であったが、家からの注

文や、一旦歌が始まると地謡の裁量で自在に展開するという状況に備え、練習では全曲を踊った。

本番は本島中南部への出稼ぎ者³が盆休み中の旧暦7月14、15日で、東の各家庭（不祝儀のあった家を除く）を廻ったり、渡久地や谷茶など商店の多い近隣の集落にも出かけて踊っていたという。宇根氏の青年時代、エイサー衆は浴衣に、男が鉢巻、女が姉さん被り、地謡が飾りの付いた笠を被るという出立ちであった。家と家との間では道歌の《唐船どーい》を歌い、男は右、女は左に分かれて「世願えさびら はんしーたい」（豊年祈願をしましょう、お婆様、の意）と歌いながら地謡・太鼓打ち・踊り手衆の順で家の庭に入り、男が外側、女が内側の二重円を作ってエイサーを歌い踊ったという。男女は各々円を逆方向に進むので、互いに斜めに向かい合って踊ることになる。腰を振る動作がある曲では、特に心がときめいたという。

エイサー衆が家を廻ると、家人に飲み物や食べ物を振舞ってもらった。但し、青年会のエイサーは「世願い」（家の繁栄や集落の豊年祈願）が目的とされたので、少なくとも戦後10年ほどは寄付を集めることはなく、ただ沖縄本島中南部から盆に帰省した人達だけが、青年会を盛り立てる気持の表れとして寄付していた。1960年頃のご祝儀の酒（泡盛）を水缶に、餅や天ぷらを筥に入れて集め、青年クラブでの反省会に飲み食いしたとのことである。

一方、後述の録音（2. 収集資料を参照）にもあるように、東では古くから青年会とは別に老人会・消防・婦人会などが門付けをすることがあったが、これは寄付集めが主な目的であった。例えば、消防で言えば「消防詰所の建設資金」がこれに当たった。今日必要に応じてエイサーを行う主な目的もこの寄付金集めにあり、2004年度には老人会・婦人会が、2006年度には婦人会が手踊りエイサーを行っている⁴。但し、今では家の庭よりも、あじまー（＝四つ角）で踊るほうが多くなっている。

しかし現在、門付けすることを決めた年でも、実用に供することのまずない一二揚の曲は練習

でも省かれがちで、伝承が曖昧になりつつある。年輩の伝承者は、寄付目的の婦人会エイサーも全曲を後世に伝える重要な機会と捉えているが、実用で充分という立場との狭間で苦慮しているのが現状である。

(2) 太鼓エイサー

1970年頃に導入した赤野のエイサーは、男による半打鼓を中心に前に大太鼓、後に女の手踊りを配したもので、勇壮さや隊列変化の巧みさには定評がある。

導入のきっかけは、宇根氏によると、青年達が酒を飲み過ぎ、浴衣姿もだらしくなったり一日中廻りきれなくなったりして、寄付を貰うのに相応しくないと考えたことから、酒をあまり飲めないようにと導入したのだという。まず、宇根氏が赤野に出向いて歌を習い、次いで踊り手有志が赴いて踊る覚え、その後、赤野から5名を招いて約一ヶ月間仕込んでもらった。当時、本部町の太鼓エイサーは旧上本部村の備瀬だけと珍しかったので、集落外で非常に人気が高く、あちこちから引っ張りだこであったという。

しかしその後、青年会活動に浮き沈みがあり、エイサーも3度ほど不調な時代があったらしい。近年では1993年頃途絶えて1995年に復活、2000年頃に再び途絶え2007年に復活している。

1995年の復活は、その年から3年間、正・副青年会長を務めた有銘高啓氏（1971生）によれば、宇対抗野球大会への参加をきっかけとした青年会復活の気運の中で実現した。集落内外での盆の門付けに加え、1997年には全島的な催しである「第33回ふるさと青年エイサー祭り 創作・郷土芸能の部」にも出場するなど、その活動はかなり盛んであったという。また、復活当初から、櫓を建てて区民総出の盆踊を行うことも視野に入れて資金を作り（多い年は100万円ほど集まったとのこと）、1996年にはそれを成し遂げている。この時は青年が太鼓エイサーを、消防・婦人会などが手踊りエイサーを披露した。この催しは好評で次年度にも計画されたが、台風で叶わず、その後、青年会活動が下火になるにつれてエイサーも途絶えることになった。

2007年の復活は、大東山区ができて青年会結成の気運が高まったことや、山里の青年達からも東の太鼓エイサーをやりたいという声が上がったことなどから実現したもので、盆に「大東山エイサー」として新たなスタートを切った。これまで東中心であった門付けも、大嘉陽・山里と大東山全体に広がり、集落外での門付けと共に盛んに行われた。また、「本部手作り市」のイベントや町青年団協議会主催の「2007本部町青年エイサーまつり」にも大東山青年会として参加し、演舞を披露している。

曲は、入場・隊列作りの《安波節》に始まり、《七月エイサー（念仏）》《久高万寿主》、《通い船》（普久原朝喜詞・曲）、《でいご音頭》（比嘉盛勇作詞 宮城栄吉曲）、《スーリ東》の6曲。他にかつて《（新）安里屋ユンタ》などもあったが、既に1995年の復活時点で行われていない。これらは総て現行の赤野エイサーの曲目にも含まれるもので、勝連半島一帯のエイサーによく見られる、新民謡を加えたスタイルである。テンポも緩やかで、手踊りエイサーとはかなり趣が異なる。

(3) 手踊りエイサー曲について

東の手踊りエイサーでは、以下のように、本調子12曲、一二揚8曲が伝承されている。本部半島地域のエイサー曲はメドレーで休みなく演奏され、必ずしも個々の曲名は明確ではないため、ここでは一般的に知られる曲名、あるいは歌い出しの歌詞を便宜的に用いて述べる。

道歌《唐船どーい》（本調子）

本調子

《二合小》……円陣を作って踊り始める。

《念仏》《テンヨー》《稲摺節》

《糸満人（ガマク小）》《伊舎堂前》《前田節》

《今帰仁ぬ城》《海やからー》

《久高万寿主》《一路平安》《越来節》

一二揚

《遊ビス清ラサ》《カマヤシナー》

《ダンク節》《副業節》《東前門》

《谷茶前》《仲門ひー》《海ぬ釣法螺》

御礼の歌

このうち現在、実際に門付けで歌い踊るのは本調子の曲のみで、特に本来酒貫いの門付け歌である《二合小》とエイサーの核をなす《念仏》の二つは欠かせないが、他は地謡が適宜選ぶ。一ヶ所あたりの総曲数は、凡そ6～8曲（2006年の婦人会主体の門付けによる）で、地謡による「御拝でーびる あんまーさり」（有難うございます、お母様、の意）というお礼の一節が出ると終わりとなる。興が乗ればカチャーシーなども行われ、次の場所へ移動となる。

上に掲げた曲の大半は本部半島地域の手踊りエイサーの主要レパートリイであるが、詳細に歌詞や旋律のありようをみるならば、概ね渡久地・伊野波・山里など本部町西南部各地区のエイサーと共通する。歌詞に合わせて方向転換する踊り方もそれらの地区と共通だが、円周方向を後進する渡久地や伊野波などとは異なり、東と山里では前進する。本部半島全域では前進が一般的なので、東はその境目にあるのであろう。

2007年8月28日、大東山区としては初の夏祭が開催された。櫓を中心に、大東山の太鼓エイサーを含む様々な催しが進行する中で、プログラムにはなかった山里と東の手踊りエイサーも各々踊られた。急なことで踊りの手は揃っていなかったが、今後、この祭が続く中で、今帰仁村の手踊りエイサーのように、門付けだけでなく櫓を囲んでの一二揚を含んだエイサーとして恒常的に受け継がれていく可能性が示されたように思われる。東では豊年祭など大規模な祭が行われなことから、エイサーは地区を代表する芸能になっている。その意味で、太鼓エイサーとどのような関係を保ちながら手踊りエイサーが今後継承されていくのか、私たちも引き続き見守っていきたい。

2. 収集資料

今回の資料化では宇根氏作成のエイサーの歌詞集（2種）と下記の録画・録音資料を用いた。なお、収録月日の（ ）は太陰暦の日付を示す。

・録画

A. 手踊りエイサー

1. 演唱

2006年2月25日 本部町地域福祉センター
 地謡：宇根良和（1935生）崎原義雄（1938生）
 古堅義則（1949生）上原良美（1953生）

太鼓：上原良光（1947生）

囃し：

仲宗根和歌子（1934生）渡口トミ（1937生）
 渡久地房子（1938生）上原靖子（1956生）

2. 踊の練習

2006年8月4日（7月11日）大東山公民館庭
 地謡：宇根良和，古堅義則，上原良美
 太鼓：上原良光

3. 踊の練習

2006年8月5日（7月12日）大東山公民館庭
 地謡と太鼓：2に同じ

4. 門付けの実況

2006年8月9日（7月16日）東集落各地
 地謡と太鼓：2に同じ

5. 大東山区第1回夏祭での実況

2007年8月28日（7月16日）本部町役場駐車場
 地謡：宇根良和 他

B. 太鼓エイサー

1. 門付けの実況

1995年8月12日（7月16日）渡久地の県道上

2. 「本部手作り市」での披露

2007年8月19日（7月7日）渡久地の市場前
 地謡：古堅義則 他

3. 2007（第4回）本部町青年エイサー祭り出演

2007年8月26日（7月14日）大浜多目的公園

4. 大東山区第1回夏祭の出演

2007年8月28日（7月16日）本部町役場駐車場
 地謡：古堅義則 他

撮影者

A 1～4，B 1～2 …小林幸男
 A 4（同時）～5，B 3～4 …小林公江

録画機材

B 1 …Kyocera KX-H6（8mmVideo）
 A 1～4，B 2 …Sony DCR-FX1・ECM-959A
 A 4（同時）～5，B 3～4
 …Sony DCR-HC1・ECM-HST1

テープ

B 1 …Fuji SDC-Pro120
 A 1，A 4（公江撮影）…Sony ME DVm63
 A 2～4（幸男撮影）…Sony DVm60
 A 5，B 2～4 …TDK ME DVm63

・録音

1. 2005年8月26日 宇根良和宅
宇根良和氏からの聞き取り
 2. 2006年2月25日 本部町地域福祉センター
 3. 2006年8月4日 大東山公民館庭
 4. 2006年8月5日 大東山公民館庭
各々，録画のA 1. 2. 3. と同時録音
 5. 2007年10月20日 北部山里クリニック
有銘高啓氏（1971生）からの聞き取り
 6. 2007年12月1日 宇根良和宅
宇根良和氏からの補足的な聞き取り
- 録音機材 1～4がDAT，5・6がHi-MD（PCM）
 1～4…Sony TCD-D8・Sony ECM-959A
 5・6…Sony MZ-RH1・Sony ECM-MS956

またこの他に，以下の録音を参考にした。

・『親子ラジオCD 1957年 エイサー』

これは，本部町渡久地の電気店「渡久地ラジオ」が，1957年8月に東区消防団・婦人会のエイサー衆などが旧店舗を門付けした際にオープンリールで録音したもので，その後，沖縄の地域ごとの有線放送「親子ラジオ」で流された。録音状態は良好で，2007年にCD-Rで同店から販売された。

更に，太鼓エイサーの赤野との比較では，以下の録画・録音を参考にした。

・1997年8月9日，1999年8月29日（以上DV），
 2005年8月28日，2006年8月20日（HDV）の
 筆者による4回の赤野エイサー録画。

・『エイサー／EISA』

これは，那覇の国際貿易が1998年8月に市販したCDで，赤野エイサー全曲の録音と実況のハイライト録画（CD-Video）を含んでおり，歌詞も添付されている。

3. 東エイサー（手踊り）の歌詞

凡例

- ・歌詞は、前記収集資料と地元の渡久地ラジオによる1957年の録音を基に、囃しや掛声を含め、楽譜と整合を図った上でゴシック体で示した。
- ・明朝体で共通語訳を付けた。訳は、地元の解釈を参考にしながら、直訳に近い形で小林幸男が行い、小林公江が校閲した。
- ・歌詞本体は外来語以外は漢字平仮名交じり表記、その他は総て漢字片仮名表記を基本とした。
- ・〈 〉 ……踊り手の歌唱部分を示す。
- ・[] ……歌詞や囃しのヴァリエーションを示す。
- ・{ } ……音数を合わせるための反復を示す。
- ・同前 ……《唐船どーい》《二合小》では歌詞の後の囃し詞と同じものを、それ以外の曲では歌詞の前の囃し詞と同じものを示す。
- ・歌意などの注釈は、……の形で適宜示した。
- ・曲名は、筆者が一般的な曲名をつけて示した。
- ・歌詞の一部だけが歌われているものは、曲によって予想される残りの部分の訳を()で補った。

本調子

道歌《唐船どーい》

畦^{あし}越^くいる水^{みづ}や 上^う揚^やぎりば止^とまる ユーイヤナー

上^う揚^やぎらなありばサ 畦^{あし}枕^{まくら} 〈ハイヤ センスル ユイヤナ〉

唐^と船^{せん}どーいさんてーまん 一^{いっ}散^{さん}走^はえーならんしや ユーイヤナー

若^{わか}狭^き町^{まち}村^{むら}ぬサ 瀬^し名^な波^はぬたん前^め 〈同前〉

音^{おと}に響^{ひび}まりる 大^{おほ}村^{むら}御^ご殿^{でん}ぬ梅^{うめ}檀^{たん}木^き ユーイヤナー 那^な覇^あに響^{ひび}まりるサ 久^く茂^む地^ちぬ這^ほい榕^が樹^{じゅ}木^ぎ 〈同前〉

今^{こん}度^ど七^{しち}月^{げつ}や はちぐわち^ちど^どう^{どう}なと^とる ユーイヤナー 明^あき^きてい七^{しち}月^{げつ}やサ 揃^{そろ}てい遊^{あし}ば 〈同前〉

畦を越える水は（土を）盛り上げれば止まる。ユーイヤナ

（もっと）盛り上げなければ、水は畦を乗り越える。〈ハイヤ センスル ヨイヤナ〉

「中国船だぞー」と言っても一目散に（港に）走らないのは、

若狭町（＝那覇の地名）村の瀬名波（＝屋号）のお爺さん。 ……なぜ行かなかったには諸説あり。

音に名高き大村御殿（＝首里にあった王子家の屋敷の名）の梅檀木。

那覇に名高き久茂地（＝那覇の地名）の這い（伸び広がる）ガジュマルの樹。

今度のお盆は、はちばち（＝まずまず）⁵になっている。明るお盆は、揃って（歌い踊って）遊ぼう。

家に入る時の唱え歌 ……現行では、行われない。

世^よ願^{にげ}えさびら はんしーたい

豊年祈願をしましょう、お婆様

1. 酒貰い歌《二合小》

くまから 乗^ちゆーんでい 言^いみせーたん 〈サー 言^いみせーたん〉

此^こまぬはんし^し前^めや 御^ご肝^{かん}ゆたさぬ 愛^あ々^あとう〔被^かてい巡^{めぐ}やびら〕

〈サウエン サウエン サーサウエン ピーラルラー ラーラルラー ニンゴー^{ニ合}ドーヤーニ合^{イッス}一升二合〉
 一合がうたびみせーら^{いちごー} 二合がうたびみせーら^{にんごー} 定み^{さだ}苦い^くさ^り 〈同前〉
 一合や^{かた}肩に^{んぶ}重さぬ 二合やうたびみそーれー^{かた} 被^かてい^か巡^{めぐ}やびら 〈同前〉

ここから来るとおっしゃいました。〈サー おっしゃいました。〉
 このお婆様はお心が宜しい。睦まじくて。〔(酒を)頂戴して廻りましょう。〕……お世辞を言う。
 〈サウエン～ サーサウエン ピーラルラー～(……哨唢の擬音)「二合ダヨ、二合。一升二合。〉
 一合下さいますか、二合下さいますか、決めづらい。
 一合は肩に重い。二合をば賜りませ。(酒を)頂戴して廻りましょう。
 ……理不尽な内容だが、担ぐのにバランスが悪いのでもう一合下さい、という理屈で請求する。

2. 《念仏》

エイサーサー エイサー ヒヤルガエイサー スーリサーサー
 〈エイサーサー エイサー ヒヤルガエイサー スーリサーサー〉
 山^{やま}にヨ育^{すだ}ちやる 山^{やま}鳥^{がらし} 〈エイサーサー エイサー ヒヤルガエイサー スーリサーサー〉
 死^しにばヨ山^{やま}に 骨^{ほね}散^ちらち 〈同前〉
 浜^{はま}にヨ育^{すだ}ちやる 浜^{はま}千^ち鳥^や 〈同前〉

山にヨ育つ山鳥 〈エイサーサー エイサー ヒヤルガエイサー ソーレ サーサー〉
 死ねば山に骨を散らせて、
 浜に育つ浜千鳥

3. 《テンヨー》

テンヨー テンヨー シトゥリトゥテンササ シターリヨーヌ ユーイヤナー
 〈テンヨー テンヨー シトゥリトゥテンササ シターリヨーヌ ユーイヤナー〉
 満^{まん}名^な松^{まつ}下^{した}に 黄^く金^が燈^{とう}籠^{ろう}下^さぎてい 〈う^{あか}り^が明^みが^るり^ば 彌^{みるく}勒^く世^せぬ^{ゆゑ}〉
 〈テンヨー テンヨー シトゥリトゥテンササ シターリヨーヌ ユーイヤナー〉
 満^{まん}名^な川^が原^らぬ^い魚^いや 雨^あ降^ふり^ばと^うぬ^ぐ 〈二^に才^せ小^こ見^みち^とう^ぬぐ 満^{まん}名^なへ^ー女^じ {へ^ー女^に} 郎^ら (同前)〉

満名(本部町並里中心部)の松の下に黄金燈籠を吊して、〈それが明るく灯れば豊年満作の証。あかし

テンヨー テンヨー シトゥリトゥテン(=楽器の擬音)ササ、シターリヨーノ ユーイヤナ)
 満名川の魚は、雨が降れば飛び跳ねる。

〈若者を見て(うきうき)飛び跳ねる(のは)、満名のあばずれ。〉

4. 《稲摺節》

稲^い摺^しり^し 粗^ア選^ラり^ユ選^ユり^ユ イヤササ ウネササ スーリサーサー
 〈稲^い摺^しり^し 粗^ア選^ラり^ユ選^ユり^ユ イヤササ ウネササ スーリサーサー〉
 気^ち張^ばてい^い摺^り [呉^いり]よ^うな^いぬ^だ ち^しち^ゆま 強^かいてい^い 喰^かみ^らさ^や
 〈稲^い摺^しり^し 粗^ア選^ラり^ユ選^ユり^ユ イヤササ ウネササ スーリサーサー〉
 南^{なん}録^り白^{はく}な^かい 黄^く金^が軸^{じく}立^たていてい 〈同前〉 / 貯^たみてい^い摺^り増^まし^ゆる 雪^ゆぬ {雪^ゆぬ} 真^ま米^{ぐみ} 〈同前〉

頑張って摺れ[呉れ]よ姉妹達。(頑張れば)初穂のお下がりをは是非振る舞うよ。

〈稲ヲ摺レ摺レ、粗^{アラ}ヲ選^ヨレ選^レ イヤササ ソレササ ソーレサーサー〉
銀の(挽き)臼に黄金の軸を立てて、〈(嘩し)〉貯めて摺り増す雪の様な白米。

5. 《糸満人 (ガマク小節)》

ガマク小^{グマク}ヨー クン^{クン}撓^グミティ^ミ イ チュイ^{チュイ}チュイ^{チュイ}チュイ^{チュイ} 清^ツラサ^ツ清^ツラサ
〈ガマク小^{グマク}ヨー クン^{クン}撓^グミティ^ミ イ チュイ^{チュイ}チュイ^{チュイ}チュイ^{チュイ} 清^ツラサ^ツ清^ツラサ〉
糸^{いちまんちゆう}満^{まん}人^{にん} 糸^{いちまんちゆう}満^{まん}人^{にん}ぬ 嫁^{よめ}なりば ア 嫁^{よめ}なりば 〈いらぶち^{いらぶち}刺^{さし}身に^みに みなう^{みなう}りさ^りりてい^{りてい}⁸〉
〈ガマク小^{グマク}ヨー クン^{クン}撓^グミティ^ミ イ チュイ^{チュイ}チュイ^{チュイ}チュイ^{チュイ} 清^ツラサ^ツ清^ツラサ〉
酒^{さか}屋^やん人^{にん} 酒^{さか}屋^やん人^{にん}ぬ 嫁^{よめ}なりば ア 嫁^{よめ}なりば 〈酒^{さか}屋^や道^{どう}具^ぐに^に みなう^{みなう}りさ^りりてい^{りてい} (同前)〉
渡^{とく}久^く地^ちん人^{にん} 渡^{とく}久^く地^ちん人^{にん}ぬ 嫁^{よめ}なりば ア 嫁^{よめ}なりば 〈鯉^{かろ}刺^{さし}身に^みに みなう^{みなう}りさ^りりてい^{りてい} (同前)〉

(糸満市)糸満の人の嫁になると、〈武^ぶ鯛^{たい}の刺^{さし}身に^みに惚^{おぼ}れぼれして⁸。(嘩し)〉

〈腰^{こし}ヲヨー 曲^まゲテ 曲^まゲテ、イ チュイ^{チュイ}チュイ^{チュイ}チュイ^{チュイ}〉……腰^{こし}に手^てを^を当^あて、振^ふる仕^し草^{くさ}で踊^{おど}る。

造^{つく}り酒^{さか}屋^やの嫁^{よめ}になると、〈酒^{さか}屋^やの道^{どう}具^ぐに^に惚^{おぼ}れぼれして。〉

(本部町)渡久地の人の嫁になると、〈鯉^{かろ}の刺^{さし}身に^みに惚^{おぼ}れぼれして。〉

6. 《伊舍堂前》

スル^{マンザイ}万^{マン}歳^{ザイ} どう^{どう}っ^っとう^{とう}珍^{みじ}し^し物^{ぶつ} スル^{マンザイ}万^{マン}歳^{ザイ}ヨー スー^{スー}リ^リサー^{サー}サ
〈スル^{マンザイ}万^{マン}歳^{ザイ} どう^{どう}っ^っとう^{とう}珍^{みじ}し^し物^{ぶつ} スル^{マンザイ}万^{マン}歳^{ザイ}ヨー スー^{スー}リ^リサー^{サー}サ〉
伊^い舍^{しゃ}堂^{だう}前^{ぜん}ぬ 三^{さん}本^{ぽん}が^がぢ^ぢまる^{まる} どう^{どう}っ^っとう^{とう}珍^{みじ}し^し物^{ぶつ}
〈スル^{マンザイ}万^{マン}歳^{ザイ} どう^{どう}っ^っとう^{とう}珍^{みじ}し^し物^{ぶつ} スル^{マンザイ}万^{マン}歳^{ザイ}ヨー スー^{スー}リ^リサー^{サー}サ〉
う^うり^りが^が下^げ居^いと^とて^てい^い 遊^{あし}び^び出^で来^きら^らさ^さや^や 〈スル^{マンザイ}万^{マン}歳^{ザイ} 遊^{あし}び^び出^で来^きら^らさ^さや^や スル^{マンザイ}万^{マン}歳^{ザイ}ヨー スー^{スー}リ^リサー^{サー}サ〉

(中城村)伊舍堂の前の三本がぢまるは、とっても珍しい物。

〈候^{ソロ}万^{マン}歳^{ザイ}⁹ と^とつ^つて^ても^も珍^{みじ}しい^い物^{ぶつ}。候^{ソロ}万^{マン}歳^{ザイ}ヨー ソー^{ソー}レ^レサー^{サー}サ〉

それの下で、歌や踊りを(見事に)やり逃げようねえ。

7. 《前田節》

ヤ^ツティ^チカラ^カ人^ス又^ス達^ス 飲^{アジ}マン^{マン}カ^カナ 飲^{アジ}ディ^{ディ}遊^ツバ^ス 〈ヤ^ツティ^チカラ^カ人^ス又^ス達^ス 飲^{アジ}マン^{マン}カ^カナ 飲^{アジ}ディ^{ディ}遊^ツバ^ス〉
今^こ年^{ねん}前^{ぜん}田^{でん}ぬ 入^いり^り[^こ稲^{いね}] ^いみ^みん^んそ^そー^ーち^ち¹⁰ 〈今^こ年^{ねん}飲^いまん^ん[^いぬ] ^い酒^{さけ} な^な何^{なに}時^{とき}飲^いむ^むが^が〉
〈ヤ^ツティ^チカラ^カ人^ス又^ス達^ス 飲^{アジ}マン^{マン}カ^カナ 飲^{アジ}ディ^{ディ}遊^ツバ^ス〉
今^い年^{ねん}稲^{いね}粟^{あわ}や 満^{まん}作^{さく}出^で来^きら^らち^ち 〈倉^{くら}に^に積^あみ^み余^あち^ち 真^ま積^あさ^さび^びら (同前)〉

今年、前の田に水を張りなさって¹⁰ [稲^{いね}が^がおい^いで^でにな^なって]、〈今^こ年^{ねん} 酒^{さけ}を^を飲^いま^まず^ずし^して^ていつ^{いつ}飲^いむ^むの^のか。

ダカラ^だ皆^{みな}ノ^の衆^{しゆう}、飲^いマ^まナ^なイ^いカ^かネ。飲^いン^んデ^で(歌^{うた}ツ^つタ^たリ^り踊^{おど}ツ^つタ^たリ^りシ^しテ)遊^あボ^ぼウ

今年、稲粟は立派に満作にして、〈倉^{くら}に^に積^あみ^み切^きれ^れな^ない^いほ^ほど^ど積^あみ^み重^{おも}ね^ね(を^をし)ま^まし^しよ^う。〉

8. 《今帰仁ぬ城》

サ^さ ヒ^ひヤ^やル^るガ^がヘ^へイ^い サ^さ ヒ^ひヤ^やル^るガ^がヘ^へイ^い 〈サ^さー^ーヒ^ひヤ^やル^るガ^がヘ^へイ^い サ^さ ヒ^ひヤ^やル^るガ^がヘ^へイ^い〉
今^い帰^き仁^にぬ^ぬ城^{じょう} 霜^{しも}成^{なり}ぬ^ぬ九^く年^{ねん}母^ぼ 〈サ^さー^ーヒ^ひヤ^やル^るガ^がヘ^へイ^い サ^さ ヒ^ひヤ^やル^るガ^がヘ^へイ^い〉
志^し慶^{けい}真^ま乙^{おつ}樽^{たる}が 貴^いち^ちゃ^ゃい^い佩^いち^ちゃ^ゃい^い[^い佩^いち^ちゃ^ゃい^い] (同前)

今帰仁の城(=北山城),遅成りの蜜柑,〈サー ヒヤルガヘイ(……威勢の掛声)ササ ヒヤルガヘイ〉

志慶真村(=現,今帰仁村諸志)の乙樽(=王の寵愛を受けた女の名)が首に掛けたり外したり。

……遅くできた王子を溺愛する様を譬えていう。

9.《海やからー》

海ヤカラーLondon スーリエイスーリ エイスリサーサー

〈海ヤカラーLondon スーリエイスーリ エイスリサーサー〉

海やからに惚りてい 夜ぬ明きせ知らん 〈夜ぬ明きてい太陽ぬ[や] 上がる迄ん〉

〈海ヤカラーLondon¹¹ スーリエイスーリ エイスリサーサー〉

親ぬ持たちやる夫や 鍛冶屋前うちちびひんがー

〈胸し[胸くる]持ちやる夫や 欲ぬ鍋な鍋(同前)〉

吾どう奥山ぬ 一本松やしが 〈如何し尋にやい どうめていもちゃが¹²(同前)〉

海の強者に惚れて、夜の明けるのは知らない。〈夜が明けて、太陽が上がる迄も。

海ノ強者, ロンドン(カラノ漂着)人¹¹. ソーレ エイソーレ〉

親が添わせた夫は, 鍛冶屋で尻が垢だらけ。〈自分で持った夫は強欲な鑄掛屋。〉

私は奥山の一本松だが, どうして尋ねて, 探していらっしゃるか¹²。

10.《久高万寿主》

スリサーサー エイスリサーサー イヤウリ[スリ]サーサー スリ

〈スリサーサー エイスリサーサー イヤウリ[スリ]サーサー スリ〉

久高万寿主や 清ら妾 尋めーてい来ん[来よん]どー 〈ヨー玉黄金 黄金又話又 ウームッサー〉

〈スリサーサー エイスリサーサー イヤウリ[スリ]サーサー スリ〉

衣着しれー 大綾衣着ち 草履くませー[くましば] 薙刀草履くでい 〈同前〉

久高万寿主は綺麗な妾を求めて行く[行っている]よ。

〈ヨー 大切ナ子(または, 女)ヨ。黄金ノ話ハ面白イネエ。ソレサーサー〜〉

着物を着せりゃ大柄の着物を着て, 草履を履かせりゃ伸び切った草履を履き。

11.《一路平安(ヂルーヒーヨー)》

ヂルーヒーヨー テイソーアンビン¹³ 嘉例吉 嘉例吉

〈ヂルーヒーヨー テイソーアンビン 嘉例吉 嘉例吉〉

嘉例吉ぬ遊び 打ち晴りていからや 〈ヂルーヒーヨー〉 テイソーアンビン 〈嘉例吉 嘉例吉〉

夜ぬ明きてい 太陽ぬ[や]上らわんゆたさ 〈同前〉

急ぐ道やしが 物尋にすむぬ[さびら] 〈同前〉

あまに見ゆる梅檀木 枝持ちぬ清らさ¹⁴ 〈同前〉

目出度い祝いの遊びに打ち解けたからには,

〈ヂローヒーヨー〉 テイソーアンビン¹³ 目出度シ 目出度シ〉

夜が明けて 太陽が[は]上らなくてもいい(よ)。

「お急ぎだろうが, ちょっと尋ねるので[尋ねます]。」「(何ですか, 里之子。何でございましょう。)」

「あそこに見える梅檀の木(は)枝振りが美しい。(緑さし副え, あれはどこかね。)」¹⁴

12. 《越来節》

ユヤーサー せる事や イサ添イ添イ添イ 〈ユヤーサー せる事や イサ添イ添イ添イ〉
 越来ヨ一階切にあてる事 文子さとうがせる事や 〈ユヤーサー せる事や イサ添イ添イ添イ〉
 夜業やがまや 飛ん巡てい 女童三人居る中に 〈ユヤーサー 居る中に イサ添イ添イ添イ〉
 うりから愛さし呼び出ち でいちゃでいちゃ女童遊びかい
 〈ユヤーサー 遊びかい イサ添イ添イ添イ〉
 吾身ん遊びや好ちやしが〜

越来間切（沖縄市南部）に確かにあった事。書記の彼氏（……富里（…姓）の転訛）がした事は、
 〈ユヤーサー した事は、サー一緒ニ一緒ニ〉

夜なべの娘宿をば飛び回って、娘三人いる中に 〈ユヤーサー いる中に〉

それから愛する娘を呼び出して、「さあさあ娘さん、遊びに（行こう）。」〈ユヤーサー 遊びに〉
 「私も歌や踊が好きだけれど〜」

……この後も、歌詞は続き、二人は山内村で青年たちと楽しく夜を明かす。

一二揚

1. 《遊ビヌ清ラサ》

遊ビヌ清ラサヤ 臣下[人数]ヌ備ワイ 〈遊ビヌ清ラサヤ 臣下ヌ備ワイ〉
 此ぬ臣下揃てい 何時遊でい〈みゆが〉¹⁵
 〈今日や七月ぬ 遊び〔御祝〕でむぬ 遊ビヌ清ラサヤ 臣下ヌ備ワイ〉
 御富や付ち来りば 誰が御富が〈やゆら〉¹⁵ 此まぬ二所ぬ 御富どうやゆる（同前）
 嘉例吉ぬ遊び 打ち晴りてい〈からや〉¹⁵ 夜ぬ明きてい太陽ぬ 上る迄ん（同前）
 今度七月や はちぐわち⁵ どうく^となる 明きてい七月や 茶碗御酒 〈同前〉

この仲間が揃って、いつ（歌ったり踊ったり）遊んで〈みるのか。今日はお盆の遊び〔お祝い〕だもの。

遊ビ（＝歌や踊）ガ美シイノハ、仲間[人数]ガ充分揃ッテコソ。〉

福の神が付いてくれば、誰の御福であろうか。（きっと）此処のお二方（…ご夫婦）の御福でしょう。

……善行を積んだ家庭には、徳が自然にやってくる、という意味だという。

目出度い祝いの遊びに打ち解けた〈からには、夜が明けて太陽が上る迄も（楽しもう）。〉

今年のお盆はますます⁶に〈なっている。明るくお盆は茶碗でお酒。（＝より立派に行えるだろう。〉

2. 《カマヤシナー》

サン カマヤシナー カマヤシナー 〈サン カマヤシナー カマヤシナー〉
 カマヤシナー節知らんしや 知らんしや 寄てい来うかん来う 吾ん習さ
 〈サーサ 寄てい来うかん来う 吾ん習さ カマヤシナー サン カマヤシナー カマヤシナー〉
 渡久地港に船浮きてい 船浮きてい 船頭や居らんさ 流りゆさ
 〈サーサ 船頭や居らんさ 流りゆさ カマヤシナー（同前）〉
 国頭岬から 船出ち船出ち 渡久地港に 走い込まち
 〈サーサ 渡久地港に 走い込まち カマヤシナー（同前）〉
 カマヤシナーに手入りし 手入りし 誰が^たん誰が^たん 此りなゆみ
 〈サーサ 上原外間ぬ 嫁かまどうー カマヤシナー（同前）〉

カマヤシナー節を知らない人は、寄って来いちょっと来い、私が教えよう。

〈サーサ（下句反復）。カマヤシナイ、シナイ、カマヤシナイ、カマヤシナイ〉

渡久地港に 船を浮かべて（反復）、船頭はいないよ、（船が）流れていたよ。

……船頭はわざといなくなって、男と女だけ船に残す粋な配慮をしたのではないか、との話。

国頭岬（=大宜味村以北のどこかの岬とのこと）から船を出して（反復）、

渡久地港に走るように入って。

「カマヤシナー（節）に手を入れるのは（反復）、誰もが誰もがこれをできるのか。」

〈「上原の外間家の嫁、カマドゥー（ならできるさ）。」〉

3. 《ダンク節》

ダンクヨー ダンク スーリヤリクヌ 〈ダンクヨー ダンク スーリヤリクヌ〉

ダンク節歌や まーから始またが ヨンサー

〈名護ぬ大兼久 歌ぬ出口 歌ぬ出口 ダンクヨー ダンク スーリヤリクヌ〉

ダンク節習ゆんでい 名護東江通てい ヨンサー 〈通る道中に ちんし割てさ ちんし割てさ（同前）〉

ちんし割らゆかね 頭割れ辛さ ヨンサー 〈頭割ていからや 世間なゆみ 世間なゆみ（同前）〉

だんく節の歌は、どこから始まったのか？ ヨンサー

〈名護の大兼久が歌の出所、歌の出所。ダンクヨー ダンク ソーレヤレコノ〉

だんく節を習うと言って名護の東江に通って、通う途中で膝を割ったんだよ。

膝を割るよりも頭を割る方が辛い。頭を割ってからは世の中が渡れようか。

4. 《副業節》

アラフク 上出来ヤラヤー¹⁶ 〈アラフク 上出来ヤラヤー〉

瀬底麦ちゆるや サヨー 暑さ涼ますし 〈夜業片暇に サ 情込みてい アラフク 上出来ヤラヤー〉

二才小ハイカラや サヨー 分髪とう金歯 〈あば小ハイカラや サ 晒し袴（同前）〉

伊野波並里に サヨー 伊豆味山越いや 〈屋敷まんまるに サ 蜜柑 Pineapple（同前）〉

（本部町）瀬底島（名産）の麦藁笠は サヨー 暑いのを涼しくする。

〈夜なべの片暇にサ情を込めて ヤレ 情を込めて（編み上げる）。アラフク 上出来ダロウネ¹⁶。〉

兄さんのハイカラなのは、（ピシッと）分けた髪と金歯。〈姐さんのハイカラなのは晒し袴。〉

（本部町）伊野波・並里に伊豆味山越えでは、〈屋敷のまわりに蜜柑とパイナップル（を作る）。〉

5. 《東前門》

東前門忍バリティナー 〈忍バリタセー〉

如何シ忍ダガ 〈御酒持ち出ヂ[寄シ] 話シソイソイ イサソイソイソイ〉

東前門すしや なんず清ら者がヨ 面や馬ぬ面に 片目切りてい

東前門 忍バリティナー 〈忍バリタセー〉

如何シ忍ダガ 〈御酒持ち出ヂ[寄シ] 話シソイソイ イサソイソイソイ〉

東前門すしや 生まりたる徴ヨ 数多女童ぬ掛かい紐い（同前）

「東前門という奴は、それほどの美男か。」「面は馬面、片目が潰れた奴さ。」（……揶揄。実は美男）

「東前門、逢引デキタカ？」〈「逢引デキタサ。」〉

「ドウヤッテ逢引シタダ？」〈「オ酒ヲ持チ出シテ[持チ寄せ]、一緒二話ヲ。」
東前門という奴には、天賦の力(が備わっているよ)。あまたの娘がつきまとう。

6. 《谷茶前》¹⁷

ナンチャ ムサムサ ^{アングーン}姐小添イ添イ ^{ヒヤン}ディヒヤ姐小添イ添イ
 〈ナンチャ ムサムサ ^{アングーン}姐小添イ添イ ^{ヒヤン}ディヒヤ姐小添イ添イ〉
 谷茶前 ^{なんちやめー}ぬ浜にヨー ^{はま}する ^{くわー}る小が ^ゆ寄てい ^ち来よんでいさなー ハイ
 〈する ^{くわー}る小が ^ゆ寄てい ^ち来よんでいさなー ハイ〉
 〈ナンチャ ムサムサ ^{アングーン}姐小添イ添イ ^{ヒヤン}ディヒヤ姐小添イ添イ〉
 する ^{くわー}る小や ^{やまとう}あらぬヨー 大和[大和] ^{やまとう}みじゅんでいさなー ハイ
 〈大和[大和] ^{やまとう}みじゅんでいさなー ハイ (同前)〉

「谷茶村(現恩納村谷茶)の前の浜にきびなごが寄って来ているってよー。オイ。」
 〈「(繰り返し)」ナルホド ヨシヨシ、姐サント連レダッテ、サア姐サント連レダッテ。〉
 「きびなごじゃない。大和鰯だってよー。オイ。」

7. 《仲門ひー》

^{あし}遊びしーが行かに ^{なかじー}仲門ひー 〈^{あし}遊びしーが行かに ^{なかじー}仲門ひー〉¹⁷
 仲門ひー へい 仲門ひー ^{あし}遊びしーが行かに 仲門ひー 〈^{あし}遊びしーが行かに 仲門ひー〉¹⁷
 〈^{あし}遊びしーが行 ^いちねー[行きば] ^{いながみちい}男三人に ^{いなく}女子 ^{わんちゆい}さら吾一人 ^{たいそー}やま〉
 仲門ひーや ^{ひー}ひー ^うじゃー ^う生わー ^{いなく}さ ^{いなく}女子 ^{くわー}ん小 ^{かみ}や ^う被て ^ういう ^うり ^う売いが 〈^う女子 ^うん小 ^うや ^う被て ^ういう ^うり ^う売いが〉
 〈^う売ら ^うら ^うん ^うどー ^うあ ^うん ^うまー ^うし ^うじ ^うて ^うい ^う汁 ^う飲 ^うま ^うやー ^うい ^うやー ^うや ^う女子 ^うん ^う小 ^うぬ ^う餓 ^う鬼 ^うら ^うさ ^うぬ〉
 仲門ひーや ^{すくち}粗 ^{むん}忽 ^{むん}者 ^{むん}さ ^{むん}み ^{むん}七 ^{むん}百 ^{むん}貫 ^{むん}する ^{むん}(^{むん}せー ^{むん}る) ^{むん}椰子 ^{むん}けー ^{むん}落 ^{むん}と ^{むん}う ^{むん}ち
 〈^{むん}七 ^{むん}百 ^{むん}貫 ^{むん}する ^{むん}(^{むん}せー ^{むん}る) ^{むん}椰子 ^{むん}けー ^{むん}落 ^{むん}と ^{むん}う ^{むん}ち〉
 〈^{むん}う ^{むん}り ^{むん}と ^{むん}う ^{むん}めー ^{むん}い ^{むん}名 ^{むん}付 ^{むん}き ^{むん}女子 ^{むん}探 ^{むん}ゆ ^{むん}ん ^{むん}で ^{むん}い [忍 ^{むん}ぶ ^{むん}ん ^{むん}で ^{むん}い] ^{むん}腕 ^{むん}む ^{むん}で ^{むん}い ^{むん}ら ^{むん}っ ^{むん}て ^{むん}い ^{むん}あ ^{むん}き ^{むん}さ ^{むん}み ^{むん}よー〉
 仲門ひー へい 仲門ひー ^{むん}芋 ^{むん}掘 ^{むん}いが ^{むん}行 ^{むん}かに 仲門ひー 〈^{むん}芋 ^{むん}掘 ^{むん}いが ^{むん}行 ^{むん}かに 仲門ひー〉
 〈^{むん}芋 ^{むん}掘 ^{むん}いが ^{むん}行 ^{むん}き ^{むん}ば ^{むん}真 ^{むん}栄 ^{むん}田 ^{むん}小 ^{むん}堀 ^{むん}や ^{むん}潮 ^{むん}や ^{むん}満 ^{むん}ち ^{むん}ち ^{むん}よー ^{むん}せー ^{むん}如 ^{むん}何 ^{むん}し ^{むん}渡 ^{むん}ゆ ^{むん}が〉
 〈^{むん}めー ^{むん}ち ^{むん}や ^{むん}引 ^{むん}ち ^{むん}貫 ^{むん}ぢ ^{むん}後 ^{むん}に ^{むん}引 ^{むん}っ ^{むん}掛 ^{むん}き ^{むん}渡 ^{むん}ゆ ^{むん}さ〉

仲門兄さん、やあ、仲門兄さん。^{もーあし}野遊びをしに行かないか、仲門兄さん。〈反復〉¹⁷
 〈^{もーあし}野遊びをしに行く時にゃ、男三人に女は私一人だけ。ああ大変。〉
 仲門兄さん(は) 山羊を大きく育てて、女は(解体して)頭に乘せてそれを売りに。
 〈「売らないよ、母さん。煮て(山羊)汁(にして)飲もうよ。」
 〈「お前は女のくせに餓鬼らしい(=食い意地が張っている)ねえ。」〉
 仲門兄さん(は) 粗忽者だよ、七百貫する椰子(=とても高価な椰子の酒壺)を落として(しまって)、
 〈それを探するのは口実。女を求めようと[女と忍び合おうと](して)、
 (親から?) ^{かいは}腕(=二の腕)を捻られて。あらららーっ。〉
 仲門兄さん、やあ、仲門兄さん。芋掘りに行かないか、仲門兄さん。
 〈「芋掘りに行くと、真栄田池は潮が満ちているのを、どうやって渡るのかい。」
 「^{ふんじ}禪を引き抜いて、背中に引っ掛け(て)渡るさ。」〉

8. 《海ぬ釣法螺》

ヒヤマタドゥッサイ 浮世又真中 サ 浮世又真中

〈ヒヤマタドゥッサイ 浮世又真中 サ 浮世又真中〉

海ぬ釣法螺小 逆なやい立ちば〔立ちねー〕

〈ひさぬある先 危なさや〔ぬ〕 ヒヤマタドゥッサイ 浮世又真中 サ 浮世又真中〉

海ぬさし草や あん清らさ靡く 〈吾身ん里前に 打ち靡く (同前)〉

海ぬ釣法螺小 恋すゆる夜や 〈辻ぬ姐小達ん 恋すらどー (同前)〉

海の疣海蝨(…細く尖った小さな巻き貝)が逆さになって立てば、

〈足の先が危ないよ。エイ マタドゥッサイ、浮世ノ真中 サ 浮世ノ真中〉

海のさし草はあんなに綺麗に(波に)靡く。〈私もあの方に打ち靡く。〉

海の疣海蝨が恋する夜は、〈辻(=那覇にあった遊郭)の姐さん達も恋するだろうねえ。〉

9. 御礼の歌 ……お礼であると同時に、踊り手に踊の終了を告げる符丁でもある。

御拝でーびる あんまーさり 〈御拝でーびる あんまーさり〉

有り難うございます。お母様。〈有り難うございます。お母様。〉

4. 東エイサー(手踊り)の楽譜

採譜は、昭和20年代から地謡を務めている宇根良和氏の演唱を基本とした。氏は所謂「生まり三線」(歌・三線を自然に自分で身につけていくこと)の即興性に富む歌い方を受け継いでいるので、歌う度に音程やリズムが微妙に変化する。楽譜はできるだけ多様な歌い方を記すように配慮したが、実際には楽譜には記しきれない多様な歌い方がみられることを付記しておきたい。

凡例

- ・楽譜は、本調子を1オクターブ、一二揚を1オクターブと長2度高く、高音部譜表に記した。但し、女性の踊り手の囃しは表記のままである。
- ・曲は一続きで、テンポは練習時に♩=120-124、門付けで♩=136-138であった。
- ・上下になった音符に数字が付してある場合は該当番数での歌い方を示し、付していない場合はその時々々のさまざまな歌い方を示す。
- ・()内の音は頻度が高くないものである。
- ・音符上の小さい八分休符は、そこが休符になる場合があることを示している。
- ・主楽譜の上の小さい楽譜は、違いが大きい歌い方を示してある。
- ・歌詞欄の矢印(→)は、その部分が拍ごと省略されることを示している。
- ・歌詞欄の〈 〉は、踊り手の歌唱部分である。
- ・楽譜中の門は♩に近い。
- ・記譜の上では拍の頭から始まる部分が、歌い方により半拍追い込まれる場合もある。

本調子

二合小

くまーから ーちゅんでい い み せ たん (さ い み せ たん) 1. く ーまぬ
2. いち ーじが
3. いち ーじや

ーはんし ーめや ーーう ち む ーゆ ーた さ ーぬ ーか ーな ーが ーなとう
ーうた び み せら ーーにん ごと が ーう ーた び み せら ーさ だ み ーぐ ーり さ
ーか たらに うぶ さぬ ーにん ごと や ーう ーた び み それ ーか みてい みぐ や びら

1-3. <サ ウ エ ン サ ウ エ ン サ ン サ ウ エ ン ピ ラ ル ラ ー
ラ ラ ル ラ ー ニ ン ゴ ド ヤ ニ ン ゴ ー イ ー ツ ス ニ ン ゴ ー>

念仏

エイサ ー ー サ エ イ サ ー ヒ ヤ ル ガ エ イ サ ー ス リ サ ー サ
<エイサ ー ー サ エ イ サ ー ヒ ヤ ル ガ エ イ サ ー ス リ サ ー サ>

1. や ーま ーに ヨ ー す だ ーちや る ーや ー ー ま ーが ーーら ー し
2. し ーに ーば ヨ ー や ー ーま に ーふ ー ー に ーち ーーら ー ち
3. は ーま ーに ヨ ー す だ ーちや る ーは ー ー ま ーち ーーちゅ ー や

1-3. <エイサ ー ー サ エ イ サ ー ヒ ヤ ル ガ エ イ サ ー ス リ サ ー サ>

テンヨー

テンヨ ー テンヨ ー シトウリトウ テンササ シタ ーリヨ ー ーヌ ーユイヤナ
<テンヨ ー テンヨ ー シトウリトウ テンササ シタ ーリヨ ー ーヌ ーユイヤナ>

1. ま ーん な ま ーち ー ーし ちや に ー ーく が に どう ーる ーさ ぎ てい
2. ま ーん な が ーら ぬ ーい ゆ や ー ーあ み ふ り ーば ーと う ぬ ぐ

<う り が あ ーか ーが り ば ー ーみ る く ゆ ーぬ ーし る し
くに せぐわん ーち ーと う ぬ ぐ ー ーま ーん な へ ーじゅ ーへ ーじゅ ら

1-2. テンヨ ー テンヨ ー シトウリトウ テンササ シタ ーリヨ ー ーヌ ーユイヤナ>

稲摺節

イニシリシリアラユリユリ イヤササウネササースリサーサ
 (イニシリシリアラユリユリ イヤササウネササースリサーサ)

1. ちばていしりよ ないぬ
 1. ちばていしりよ ないぬ - ちや - - しちゆ - ま - 1. - し ていかみらさ や
 2. なんじゃ - うし - な - か - い - - く が - に - - - じ - く た - てい - てい
 3. たみてい - しり - ま - しゆ - る - - ゆち - ぬ - - ゆちぬま - ぐ - み

1-3. (イニシリシリアラユリユリ イヤササウネササースリサーサ)

糸満人(ガマク小節)

ガマクグワ ヨ - クンタ ミ テイ - イチュイチュイチュイ - ツラサ ツラサ 1. いちまん - ちゆ
 (ガマクグワ ヨ - クンタ ミ テイ - イチュイチュイチュイ - ツラサ ツラサ) 2. さかやん - ちゆ
 3. とうぐちん - ちゆ

いちまん ちゆ ぬ ゆみなり ば ア ゆみなり ば (いらぶち さしみに - みなうり
 さかやん ちゆ ぬ ゆみなり ば ア ゆみなり ば (さかやど - ぐに - みなうり
 とうぐちん ちゆ ぬ ゆみなり ば ア ゆみなり ば (かちゆ - さしみに - みなうり

- さり てい ガマクグワ ヨ - クンタ ミ テイ イチュイチュイチュイ - ツラサ ツラサ
 - さり てい ガマクグワ ヨ - クンタ ミ テイ イチュイチュイチュイ - ツラサ ツラサ
 - さり てい ガマクグワ ヨ - クンタ ミ テイ イチュイチュイチュイ - ツラサ ツラサ

*「ゆみなりば」の部分は踊り手が歌う場合もある。

伊舎堂前

スルマンザイ - どうつ - とうみじらしむん スルマンザイ ヨ - スリ
 (スルマンザイ - どうつ - とうみじらしむん スルマンザイ ヨ - スリ)

1R. うりが - しちゃ - - うと
 1. いさど - めぬ - さんぶんがちまる - どうつ - とうみじらしむん (スル
 サ - サ) 1R. うりが - しちゃ - - うと → てい - - あしびでいきらさや (スル

マンザイ - どうつ - とうみじらしむん スルマンザイ ヨ - スリサーサ
 マンザイ - あしびでいきらさや スルマンザイ ヨ - スリサーサ

前田節

ヤティカラ ツヌチャ ヌマンカ ナー - ヌディアシ バ) → 1. く -とうし -め -ん
 (ヤティカラ ツヌチャ ヌマンカ ナー - ヌディアシ バ)

一 た ぬ - い り み ん そ - ち - << と う し - ぬ ま ぬ さ き - な い ち
 わ - や - ま ん さ く で い き ら ち << ら に - ち み あ さ ま ち - ま ち ん

一 ぬ む が ヤティカラ ツヌチャ ヌマンカ ナー - ヌディアシ バ)
 - さ び ら ヤティカラ ツヌチャ ヌマンカ ナー - ヌディアシ バ)

今帰仁ぬ城

サ ヒヤルガ ヘイササ ヒヤルガ ヘイ 1. なちじんぬ -ぐし
 (サ ヒヤルガ ヘイササ ヒヤルガ ヘイ) 1R. しちまうとう -だる

く -しむな い ぬ -くに ぶ (サ ヒヤルガ ヘイササ ヒヤルガ ヘイ)
 が -ぬちやい は ちや い は ちや い (サ ヒヤルガ ヘイササ ヒヤルガ ヘイ)

海やからー

ウミヤカ -ラ ドン ド - -ン ス リ エイス -リ エイスリサ - サ
 (ウミヤカ -ラ ドン ド - -ン ス リ エイス -リ エイスリサ - サ)

1. うみ や か ら - に - - ふ り てい - - ゆ ぬ あ き - せ - し - ら -
 2. う や ぬ む た ち や る う と う や - - か ん じ ゃ め - う ち ち び ひ ん

ん (ゆ ぬ あ き てい - てい - だ - ぬ - あ が る - ま で い - ん
 が (ど う - し む っ ち や る う - と う - や - ゆ く ぬ - な び な く

1-2. ウミヤカ -ラ ドン ド - -ン ス リ エイス -リ エイスリサ - サ)

久高万寿主

スリ ササー - エイスリ ササ イヤウリ サーサ スリ 1. く
 (スリ ササー - エイスリ ササ イヤウリ サーサ スリ) 2. ちん

だ - か - まんじゅ - す - や - つら ゆ - ベ - とうめ - てい きん ど -
 く しれ - う ふ あ や ちん ちち さば くませ - なぎ な た さば くでい

1-2. <ヨ タ マー - - ク ガ - ニ クガニヌ ハナシヌ ウームツ

サ スリ サ サ - エ イ スリ サ サ イ ヤ ウリ サ - サ スリ

一路平安(チル-ヒーヨ)

チル ヒーヨ テイソ アンビン カリユシ - カリユシ
 (チル ヒーヨ テイソ アンビン カリユシ カリユシ)

1. かり ゆ - しぬ - - あし - び - う ち は り てい - - から - や
 2. ゆぬ あ - きてい - - てい - だ - ぬ - あ が ら - わん - - ゆ た - さ
 3. いす ぐ - みち - - やし - が - む ぬ た - ず に - - さ び - ら
 4. あま に - み ゆ る - しん だん - ぎ - ゆ だ む - ち ぬ - - ち ゆ ら - さ

1-4. <チル ヒーヨ> テイソ アンビン <カリユシ カリユシ>

越来節

ユヤ サ - せ る - く とう や - イサソイソイソイ 1. ぐい く - ヨ - - ま ぢ り
 (ユヤ サ - せ る - く とう や - イサソイソイソイ) 2. ゆ な - び - - や が ま

に - あ - て - る く - とう - てい - く - ぐ - - さ とう が - せ る
 や - とう - ん - み ぐ てい - み や - ら - び - - さ ん に ん - せ う る

く とう や - ユヤ サ - せ る - く とう や - イサソイソイソイ
 う ち に - (ユヤ サ - う る - う ち に - イサソイソイソイ)

一二場

遊ビヌ清ラサ

アシビヌ チュラサ ヤ シンカヌ スナワイ 1. くぬし ん か - す - - る てい
 (アシビヌ チュラ サ ヤ シンカヌ スナワイ) 2. みふや - ちち - く - - り ば

- いち あ - し - - でい (み ゆ が き ゆ や - し ち ぐ わ ち - ぬ
 - た が み - ふ - - が (や ゆ ら く ま ぬ - た と う く る - ぬ

- あ し び - で む ぬ アシビヌ チュラサ ヤ シンカヌ スナワイ)
 - み ふ どう - や ゆ る アシビヌ チュラサ ヤ シンカヌ スナワイ)

カマヤシナー

サンカマ ヤシナ - カ マ - ヤ シ ナ とう 1. カヌヤ シ - ナ ぶ し
 (サンカマ ヤシナ - カ マ - ヤ シ ナ -) 2. とう ぐ ち ん な とう -
 3. カヌヤ シ ナ - に -

- し ら ん し - や - - - し ら ん し や - ゆ て い く - か ん く - わ ん な ら
 - ふ に う き - て い - - ふ に う き て い - し ん だ う や う ら ん さ な が り ゆ
 - て い い り - し - - - て い い り し - た が ん た - が ん く り な ゆ

- さ - <サ - サ ゆ て い く - か ん く - わ ん - な ら さ
 - さ - <サ - サ し ん だ う や う ら ん さ な が り ゆ さ
 - み - <サ - サ う い ば る ふ か ま ぬ ゆ み - か ま ど う

1-3. - カ - マ - ヤ シ ナ - サンカマ ヤシナ - カ マ - ヤ シ ナ -)

ダンク節

*ダンクヨ ダンク - ス リ ヤリクヌ 1. ダンク - ぶ し う - た - や
 (ダンクヨ ダンク - ス リ ヤリクヌ) 2. ダンク - ぶ し な ら ゆ ん てい
 3. ちんし - わ ら ゆ - か - ね

ま か ら は じ - ま た が ヨ ン サ - <な ぐ ぬ - う ふ が - に - く
 な ぐ あ ら が り - か ゆ て い ヨ ン サ - <か ゆ る - み ち な - か - に
 ち ぶ る わ れ - し む さ ヨ ン サ - <ち ぶ る - わ て い か - ら - や

う た ぬ ん ち く ち - う た ぬ ん ち く ち *ダンクヨ ダンク - ス リ ヤリクヌ)
 ち ん し わ - て さ - ち ん し わ - て さ ダンクヨ ダンク - ス リ ヤリクヌ)
 し き ん な - ゆ み - し き ん な - ゆ み ダンクヨ ダンク - ス リ ヤリクヌ)

* 「ダンクヨーダンク」は「ダンクヨーダンクヨー」と歌われる場合もある。この場合、「ヨ」はd音となる。

副業節

ア ラ フ ク ジ ョ デ イ キ ヤ ラ ヤ 1. し す く - む ん ぢ ゅ る や -
 <ア ラ フ ク ジ ョ デ イ キ ヤ ラ ヤ> 2. に せ ぐ わ - は い か ら や -
 3. い ぬ ふ あ - な み ざ と に -

- サ ヨ - - あ ち さ し だ ま す し <ゆ な ば か た ひ ま - に -
 - サ ヨ - - わ き が み と う き ん ば <あ ば ぐ わ ハ イ カ ラ - や -
 - サ ヨ - - い づ み や ま ぐ い や <や し き ま ん ま る - に -

サ サ な さ き く - み - て い ア ラ フ ク ジ ョ デ イ キ ヤ ラ ヤ
 サ み - か ん タ イ ナ ン プ ア ラ フ ク ジ ョ デ イ キ ヤ ラ ヤ
 ア ラ フ ク ジ ョ デ イ キ ヤ ラ ヤ

東前門

ア ガ リ メ ジ ョ - - シ ヌ バ リ テ イ ナ <シ ヌ バ リ タ セ> イ チ ャ シ シ ヌ ダ ガ

<ウ サ キ ム チ ン チ - ハ ナ シ ソ イ ソ イ イ サ ソ イ ソ イ ソ イ> あ が リ - め じ ょ す
 あ が リ - め じ ょ す

- し や - - な ん ず ち ゅ ら む ぬ が - ヨ - ち ら や ん ま ぬ - ち ら に
 - し や - - ん ま り た る し る し - ヨ - あ ま た み や ら び → ぬ

か た み ち り て い ア ガ リ メ ジ ョ - - シ ヌ バ リ テ イ ナ <シ ヌ バ リ タ セ>
 か か い し が い ア ガ リ メ ジ ョ - - シ ヌ バ リ テ イ ナ <シ ヌ バ リ タ セ>

イ チ ャ シ シ ヌ ダ ガ <ウ サ キ ム チ ン チ - ハ ナ シ ソ イ ソ イ イ サ ソ イ ソ イ ソ イ>

谷茶前

ナ ン チ ャ ム サ ム サ ア ン グ ワ ソ イ ソ イ デ イ ヒ ヤ ン グ ワ ソ イ ソ イ 1. た ん ち ゃ
 <ナ ン チ ャ ム サ ム サ ア ン グ ワ ソ イ ソ イ デ イ ヒ ヤ ン グ ワ ソ イ ソ イ> 2. す る

- め ぬ - - は ま に - ヨ - - す る - る - <ぐ わ - が ゆ て い ち ょ ん
 <ぐ わ や - - あ ら ぬ - ヨ - - や ま - と う - や ま と う - み じ ゅ ん

でいさな - へい <す る - ー る > わ - が ゆ てい ちよん でいさな -
 でいさな - へい <や - ま - とう > や まとう - み じゆん でいさな -

へい ナンチャムサムサ アングワソイソイ ディヒヤングワソイソイ

仲門ひ--

あしびし が - いかになかじよ - ひ - 1. なかじよひ へい な - か -
 <あしびし が - いかになかじよ - ひ - > 2. なかじよひ や - ひ - じゃ -
 3. なかじよひ や - すくちな -
 4. なかじよひ へい な - か -
 4R. →

じよ ひ - あ し び - し が - いかになかじよ - ひ が <あ - し びん
 うわ さ - い な ぐ ん - ぐわ や - か み てい けりうい が <い - な ぐん
 むん さみ しちひ やつ ぐん - す る - や - し け - う とう <し - ち ひゃ
 じよ ひ - し う む ぶ - す い が - い か に な かじよ - ひ <う - む ぶ

し が - - いかになかじよ - ひ) あし び しん が - - い - きん ば
 ぐわ る - - か み てい けりうい が) うら り めい - - あ - きん ぢ
 <ぐん が - - や - し け - う とう > う む ぶ い が - - ない - ぢき
 い が - - い か に な かじよ - ひ) う む ぶ い が - - ない - ぢき

-- い き が み - ち や い に い な ぐ さ ら わ ん ち ゆ い た い そ - → や ま
 -- し じ て い し る め ま に や - や - さ い な ぐ ん ぐ わ ん た が ち ら → さ め
 -- い な ぐ さ ぐ ゆ ん でい け - や - な む で い ら - てい - あ き さ み → よ -
 -- め - だ ぐ む い や → う す や み つ - ち ょ - せ - ち ゃ - し わ た ゆ が
 -- <め - ち や ひ ち め ち → く し に ひ つ - か - き - → わ た ゆ さ

海ぬ釣法螺

ヒヤマタドゥッサイウチユヌマンナカ - サ ウチユヌマンナカ うみぬ
 <ヒヤマタドゥッサイウチユヌマンナカ - サ ウチユヌマンナカ > うみぬ

- ちん ぼ - ら - さ ぐわ さかな や い - た - - ち ばく <ひ さぬ ある さち
 - さ し - ぐ - さ や あんちゆ ら さ - な - - び く <わ みん さとうめに

- あ ぶ な さ や く ヒヤマタドゥッサイウチユヌマンナカ - サ ウチユヌマンナカ
 - う ち な び く ヒヤマタドゥッサイウチユヌマンナカ - サ ウチユヌマンナカ

謝辞

エイサーについて多くのことをお教え下さいました宇根良和氏と有銘高啓氏、そして、快く録音や行事を取材させて下さいました東の皆様
に心より御礼申し上げます。

参考文献

本部町史編集委員会

1994『本部町史 通史編』本部町
半田一郎編著 1999『琉球語辞典』大学書林
小林公江・小林幸男

2007「沖縄県本部町健堅の手踊りエイサー」
『関西楽理研究』関西楽理研究会

参考CD

渡久地ラジオ 2007「4. 東区消防団、婦人会」
『親子ラジオCD 1957年 エイサー』

渡久地ラジオ、本部町
国際貿易 1999「赤野エイサー」

「Movie “赤野青年会エイサー”」
『エイサー／EISA』国際貿易

註

1. 楽譜資料は小林公江が採譜し、小林幸男が校閲して作成した。また、歌詞資料は小林幸男が作成し、小林公江が校閲した。
2. 地謡の練習は、声が枯れるまで真剣に歌えという指導であった。一旦完全に枯らして戻せば本番で一日中歌っても大丈夫、と言われた。喉を戻すには塩昆布が一番で、本番中も塩を携行して舐めながら歌ったと、宇根氏は言う。
3. 戦後の出稼ぎは、圧倒的に基地労働であった。
4. 2008年度には、婦人会と老人会で行うことが計画されている。
5. 畦枕は通常、稲穂がたわわに実って畦を枕にしているように垂れ下がる様を言うが、宇根氏はこのように解している。(この歌詞は意識)
6. 「はちぐわち」(八月)では意味が通りにくい。かつて取材した国頭村・大宜味村などの故老の伝承に従って「はちばち」で訳した。東に限らずここを現在「八月」と歌う地域は非常に多い。はちばちが死語になっているためだろうか。
7. 1957年録音では「粗」ではなく「米」だが、誤りとのこと。但し、人によってはそのように歌っていたかもしれない、という。
8. 「みなうりさびてい」は、周辺地域の歌詞では「なうりさりてい」が多いが、何れにせよ意味は分かりづらいようである。ここでは宇根氏に従った。
9. 候万歳に「候」の漢字を当てたのは、『琉球語辞典』に依る。「～候」を連ねる万歳から囃しがきているということであろうが、今日このことを意識して歌う人はまずいない。
10. 「いめんそーち」の転訛だが、こうした現象は沖縄各地で起こっており、従って解釈も様々となる。ここでは宇根氏に従った。
11. 宇根氏は、海やからーを釣り上手かと言う。しかし若い時分に「海ノ男イギリス、明日来テミナサイ」との標準語の囃し句も歌っていたというので、糸満の漂着英人譚に従って訳した。
12. 芝居からの引用に違いないが、出典は思い出せないとのこと。
13. 「ヂルーヒーヨー テイソーアンピン」という囃しは本島中部などの伝承から考えて、「一路[或いは帰路]平安 海上安全」の転訛変容と考えられる。しかし、同様の現象は本部半島に広くあるので、そもそもこの地にこの歌が伝わった時点で既に変わっていたのであろう。
14. 有名な琉球歌劇《泊阿嘉》(我如古弥榮作)一幕三場の冒頭。主人公の阿嘉樽金が恋する鶴の家のことを船頭に尋ねる場面で、《一路平安》の旋律で歌われる。原曲通りだと()で示した内容の下旬が入り、そこが囃しの部分に当たるが、宇根氏に尋ねたところ、そのように囃しで歌うことはないという。なお、現行の一般的な台本では、「すゆが」は「すらに」。
15. 1957年録音では上句全体(第一節で言えば「みゆが」まで)を地謡が担当しているが、宇根氏に依れば当時でもそれは恒常的なものでなく、地謡が囃しに加勢した結果の可能性が考えられるという。
16. 一般に「副業的ヤラヤー」と歌われる囃し句を、東は「上出来ヤラヤー」と解し、伝承している。
17. 各節にある踊り手による句の反復は、宇根良和氏の歌詞集にはないが、1957年の録音にはあり、現行でもしばしば起るので載せた。宇根氏もこのことは了解されている。
17. 宇根氏の歌詞集では、全体に雑踊《谷茶前》に近い歌詞が記されているが、ここでは歌われている実態に合わせて表記した。主な違いは「やんていんどー」→「でいさなー」である。